



大抵の苦心ではなかつたが養育した時の喜びは今に忘れ得ない。

新築川内高校図書館に
もOEDは何をさてお

賛念なことであつた。私が広島縣の或る學校に奉職した頃 NED の新版インクレスフオードイックリッソフオードイックリッソナリ（通稱 D P D）をロンドン洋文したことがあつた。十年前の版だが當時の五百五圓といふ代金を學

先般卒業生父兄より多額の御寄附により、豫想以上に早く校舎が復興したが、特別款宝も圖書館もない現在の高校生は實に窮乏の境であるといふ世論が卒業生の間に起り、昭和二十二年七月の總會で同窓會の五十周年紀念事業として圖書館建設の事が正式に決定したのである。昭和二十二年十一月頃、中學の四

湖めぐる火口連丘今もなほ
 のしるゝに邊境をなす
 朝飯の湯氣はのどに暖かく
 頬にふれきて初秋を驚嘆
 靜もるい此の御社に夕されば
 木立の奥に郭公のなく
 しミビと身の老境を思ふかな
 腕の細きと友とくらべつ
 移り田の一穂一穂を掌面に
 受けつゝわれの心やわらぐ
 とまの屋に月の満ちこぼれ落ち
 すききの除け虫の音すすし

上野幸一

三階の部屋に通されて
つた。やが
ホツト一息荷物を下し
歸途につい

◎開校記念子規思句稿

葛の花曳さへてこむらさき
輝けさやけちなまじき月あかり
夕映えて舞臺のゆけに柳散る
山びこの絶えざる道の葛の花
胡麻の實の二つ並んで未は花
て癡こらんだ時は動け
ない夜湯に浸つていだ
夕食後湯にづかりなが
ら汗の疲れをなほす
ど流汗の匂ひも心持良
い。外に出るともうす
つかり暗くなつて湯上
りの肌になやりと夜露
が冷たい
薄暗い部屋に癡ころび
ながら今日一日を思ひ
起してでる。朝露時に
學校を出て鶴島神宮の
下に着いたのが十二時
過ぎ。某處で朝食を食べ
て神宮に参拜した。
重いがせげの山道を
重い荷物に苦にしながら
古宮跡まで登り着いて
てそこの山小屋に二休
みする。ふり仰くと順
水口あたりに晨光がま
る。霧立たなま
何んな事を
此時の間に
まふ。夜中
が覚める。
立つ秋近
洋服だけ
位である。
水の音だけ
「おい雨が
誰かがびつ
に云ふ。そ
の機でもち

一併
寄
同

灰の燃え殻 硯に良く起
はな起き、漣
又馬の背
を、しな
登り着いた
かかに嬉しか
し山をトリ
た時は夏の
石田薊木
緒方 勝
上野 學
關 和
辻 ソネ
弱かつた。
山道と
硯黄谷迄來
林田温泉に
小道の脇に
が立つてい
の月は芽を
山の谿間に
夏とはいへ
高原の夜は
は眠られぬ
が静かな中
に
降りぞ」と
くした様
ういうと雨
うつら

手鏡に入りし青桐額をそ
雨やみて氷のなまりに目
冷飯に齒ぐそ冷たき秋夜
朝顔の輪いよよ小さな
秋雲や岩井の水を吸ひは
秋蝶やききんぎも裏りけり
シヤボシ玉暮れ行く秋
秋風に消え行く雲の山
たそがれて虫の鳴きや
ピラとんで地をたねは
山峡に提燒くる日や萬
電線に月はさまれて願
秋の灯を低く落して學
下宿屋の夜學の灯一つ
砲丸の温味ゆきだし秋
野ねすみの庭ををなが
電燈下墨に映ひ入る夜
うらさむくつどひて學
一時雨葉鶏頭に紅雪

詩一 銀嶺の
空曙れて白銀の山容は
蒸晴らしく輝き私建の
丁度明淨なる憧憬に燃
胸にけ描る永遠女性の
打ち仰ぐ曲線美は明朗
その典範なる如
私の魂は白衣を
き、崇高なる處女境へ
貫し、心臓の扉より澄
光輝ある山雲の色彩に
私は一切の憂鬱を忘れ
高い銀嶺の頂きに眠ら

Journal of Management Education 30(6)

[illegible]

10

兒島市小川町
東鄉村舟倉町
鎌田醫院
院長 高橋輝志
森園病院
川内市白和町
（三開社跡）
電話四七番

森園病院